

*プロフィール

岩崎 花奈絵 Kanae Iwasaki

東京都練馬区在住、22歳。妊娠8ヶ月の早産により1,392gの極低出生体重児として出生。その後遺症で脳性麻痺となり、四肢体幹機能に障害がある（身障1級）。姉の影響で、小1の時より内田陽子先生に師事、ピアノを習い始める。当初は姉と、現在は母と連弾。主に右手人差し指一本でメロディーを弾く。

2001年迫田時雄先生と出会い、2005年「第1回ピアノパラリンピック」(横浜)に出演。2007年「ピアノパラリンピック・デモンストレーションコンサート in New York」に参加、国連とカーネギーホールで演奏。2009年第2回「UNHEARD NOTES」バンクーバー国際障害者ピアノフェスティバル大会入賞、2012年台湾で招待演奏。

2013年「第3回「UNHEARD NOTES」ウイーン国際障害者ピアノフェスティバル」に参加、特別聴衆賞を受賞。2014年11月JASRAC音楽文化賞受賞。2015年3月国立音楽院を卒業。国立音楽院では、ピアノを池田公生先生、エレクトーンを川田祐子先生に師事。

太田将誉 Masataka Oota

1986年11月5日生 自閉症スペクトラム障がい

岡山市生まれ 4歳から音楽教室に入り、生まれて初めてピアノに触れ、いきなり両手で即興演奏を弾き、周囲を驚かせた。以降、発表会などでは即興演奏を得意とし、常に新曲を創り続けてきた。

2009年:大阪府障がい者芸術コンテスト音楽部門グランプリ受賞 (オリジナル曲「夕日」)

2013年:第3回「UNHEARD NOTES」ウイーン国際障がい者ピアノフェスティバル」にて銅賞受賞 (喜びの歌編曲)

2015年:「UNHEARD NOTES」汎太平洋・国際障がい者ピアノフェスティバル in 東京」大会にて日本人代表選考会で金賞、汎太平洋大会では銅賞 (赤とんぼ変奏曲、「追憶」) 受賞。

2015年:第12回ゴールドコンサート湯川れい子賞インターネット人気投票3位
NHKラジオ「共に生きる」新年特番ゲスト出演、オリジナル曲3曲が全国放送
夢はオーケストラの作曲家になること。

月足さおり Saori Tsukiashi

1977年、熊本県に生まれる。うまれながら、「仙骨欠損脊椎形成不全症候群」と診断され、12歳くらいまでしか生きられないかもしれないと告げられる。しかし、さまざまな治療や、周りの方々のサポートで、現在、体の中に、病の進行を遅らせるための器械を2つ植え込み、治療を続けながら生活している。昭和音楽大学ディプロマコースを首席で卒業、同大学学長賞を受賞。全国各地でリサイタルを行う他、「いのちの音色を響かせたい」をタイトルに各地で講演中。

2013年第3回「UNHEARD NOTES」ウイーン国際障害者ピアノフェスティバル」にて 課題曲の部、自由曲の部両方で 金メダルを受賞。熊本県知事表彰、あさぎり町民栄誉賞を受賞。

演奏曲目と 演奏者のコメント

岩崎 花奈絵 Kanae Iwasaki

2012年6月、障害者音楽仲間4人で「音のりぼん」というグループを結成、特別支援学校、普通学校、福祉施設、病院等で、また、花奈絵個人でも、地域の児童館、敬老館等で演奏活動をしている。

夢は、「障害が重くてもピアノを楽しめる。」ということを経験した人にアピールすること。重い病気や障害を負った人々に希望と勇気を与えるために、一人でも多くの人に演奏を聴いてもらいたい。2020年東京オリンピックでは芸術部門ピアノパラリンピックが実現することを願っている。

- ①「喜びの歌」2013 ウィーン大会 A コース（課題曲）で特別聴衆賞をいただいた曲
- ②「Waltzing A Lot of Flowers（百花繚乱）」JASRAC 音楽文化賞受賞記念に、池田公生氏が花奈絵のために作曲したオリジナル曲

太田将誉 Masataka Oota

今回は私のオリジナル曲をぜひ聞いていただきたく、2曲用意いたしました。

- ①1曲目は「第3回「UNHEARD NOTES」ウィーン国際障がい者ピアノフェスティバル2013」大会にて銅メダルを受賞しました「ベートーベン第九「歓喜の歌変奏曲」。
- ②2曲目は揺れ動く心の模様を表現した「儂い夢」。忙しく過ぎ去る日々の中でふと立ち止まり、心の中を覗いてみるきっかけとして頂けると嬉しいです。

月足さおり Saori Tsukiashi

- 演奏曲目、
- ①. ショパン—ゴドフスキー「エチュード作品10—3（別れの曲）」
 - ② ベートーベン第9 「歓喜に寄す」のテーマによる4つの祈りの歌を演奏します。

左手だけでの演奏をするようになって、3年が経ちます。体の使い方やペダリングなど、まだまだ克服しなければならない課題はたくさんありますが、これからも、納得いくまで努力し、障害に注目されるのではなく、音色を聴いていただけるよう、自分の障害に甘えないで、前に進んでいきたいと思っています。そして、最近、手術を繰り返し、再び両手での演奏の訓練に取り組んでいます。

日本財団ホームページ

<http://blog.canpan.info/concert/>